

アミーゴ会だより

2022年4月
通巻第50号
季刊 2022-II

www.mex-jpn-amigo.org



発行人：河嶋正之
編集人：河嶋正之
事務局：笠井道彦

メキシコへの誘い：歩行記 2

ぶらりメキシコ人旅—ケレタロ

メキシコ・日本アミーゴ会 会員
写真家・ルポライター 阿部修二

阿部修二会員に「ぶらりメキシコ人旅」と題して、メキシコのあちこちを訪ね歩いたエッセイを連載していただきます。阿部さんは2005年よりアミーゴ会の会員で、1947年岩手県花巻市生まれ。岩手大学工学部卒および桑原デザイン研究所ビジュアル・デザイン科卒。日本写真家協会元会員。メキシコ教会美術に惹かれ1986年より毎年渡墨。2005年以降4冊のメキシコ関係書籍を発行。最新作は『先住民のメキシコ—征服された人々の歴史を訪ねて』（2021年9月刊 明石書店）です。<編集部>

瓦礫の大地=コニンのゲレンダロ(ケレタロ)

メキシコ市から国道57号線を北上し、200キロほど進むとケレタロ州の州都ケレタロ市に辿り着く。車で3時間ほどの旅だ。人口75万人程のこの中堅都市は、今も周辺部に拡大を続けて近代的な都市に変貌を繰り返している。その中心部にはメキシコ植民地時代の世界歴史遺産が残されている。私がたびたびこの町に足を運んでいるのは大都市の喧噪がないのが気に入っているからだ。歴史地区の規模はそれほど大きくないし、自分の足でゆっくりと回れる規模だ。その地域にはなんと7つもの豪華な修道院・教会があり、美しい街並みにひととき身を置いて中世を味わうのに最適な街だと思っている。

メキシコ州とケレタロ州の州境にあるサン・ファン・デル・リオ市以北は、アステカ時代には帝国の勢力圏外で、遊牧の民チチメカ族が暮らすきわめて荒涼とした土地と考えられていた。今日では上流にできたダムのおかげで水量が少なくなったサン・ファン川の深い渓谷が、自然の要塞になっていたためと考えられるが、その北の地には税の徴収可能な集落がなかったために、アステカ帝国の為政者には価値のない土地だと思われていた。

さて、そのサン・ファン川から約40キロ北東にある州都ケレタロ市の成り立ちは、とても興味深いので紹介したい。というのも、スペイン人がアステカ帝国を征服した後に、チチメカ領域と呼ばれていたメキシコ北部の広大な土地に、オトミ族のコニンという先住民がケレタロ市設立の基礎を作ることになったからである。この広大な領域にはサカテカス、グアナファト、サン・ルイス・ポトシなどの鉱山都市があり、いずれも銀鉱山発見後に、スペイン人が大挙して移住して町を形成したことは周知のことであろう。だが、ケレタロの場合、その経緯がそれとは異なっている。

メキシコ州北部の、たぶん日本人にはあまり聞き慣れない町名のヒロテペックというオトミ族にとって重要な町がある。いつか紹介したい魅力的な町の一つだが、残念ながら今回は紙幅が許さない。植民地以前、この町の傘下であり、北30キロにあるノバラ村(今日ではイダルゴ州)にコニンという若い酋長がいた。このコニンなるオトミ族の酋長が、サン・ファン川を越えて北部地域に入り込み、遊牧の民と物々交換による交易をしていたことが知られている。彼は北に住むチチメカ族から動物の毛皮や珍しい羽毛、翡翠や黒曜石などの鉱物と、トウモロコシや織物、工芸品と交換することを生業としていた。コニンは仕事柄、チチメカ族が姿を現す狩り場や水場、果実の採集場を承知していたからだと思うが、スペイン人に対して好戦的なチチメカ族と友好関係を保っていたことも容易に想像できる。



ノバラ村

目次

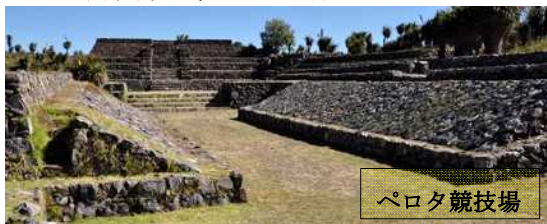
- | | | |
|---|------------------|------|
| 1. メキシコへの誘い：「ぶらりメキシコ人旅 2 —ケレタロ」 | 写真家・アミーゴ会会員 阿部修二 | ...1 |
| 2. 私のメキシコ：「メキシコの著名人 1 —ノーベル賞&文学者」 | アミーゴ会会員 桜井悌司 | ...5 |
| 3. アミーゴ会活動報告：「2021年度決算案・2022年度予算案」 | アミーゴ会 幹事会・事務局長 | ...7 |
| 4. トピックス：「メキシコ市の新国際空港 AIFA が開港」...4「全州が3期連続で緑色の感染警戒」...8/あとがき...8 | | |

オトミ族のコニンの生活環境が一変したのは、スペイン人エルナン・コルテスがテノチティトランを征服してからのことで、当然ながら先のイロテペックの町も2人のエンコメンデーロによって管理されることになった。このエンコメンデーロというのは表向きには町の管理の責務を有し、征服の成功報酬として町から税を徴収する権利を持つスペイン人兵士のことをさす。私は「収税領主」と訳している。この制度はすでにスペインに征服されていたイスパルニョーラ島、キューバ島で行われていたために、メキシコ征服後、総督となったコルテスは部下の戦績に応じて、アステカ帝国傘下の地方の町から徴税する権利を兵士に与えていたのである。詳しくは拙著「メキシコ歴史紀行ー征服の十字架」(明石書店)を参考にされたい。

ノバラとヌマダヘイ

アステカ帝国の北辺に位置するオトミ族の町ヒロテペックは大きな町で、そのために2人のスペイン人に徴税の権利が分け与えられたが、そのうちの1人はフアン・ハラミージョという兵士だった。彼が征服戦争でどれだけ貢献したかの記述は、ベルナル・ディアスの著書「メキシコ征服記」には書かれていないためにきわめて印象の薄い兵士だが、コルテスの通訳兼妾、コルテスの子を産んだ先住民女性マリンチェと結婚したことで知られている。彼の収税領地となった先のコニンのノバラ村の住民も、こうしてハラミージョの徴税対象になったのだった。

私の想像では、収税領主のくつわから逃れるためにコニンは一族を引き連れてノバラ村を後にし、何度も足を運んで熟知しているチチメカ領域に新しい落ち着き場所を探しに出かけたのだと思う。それはテノチティトラン征服の翌年、1522年のことだと言われている。彼が最初に落ち着いたのは現在のケレタロ市東部の、オトミ語でヌマダヘイ=ペロタの競



ペロタ競技場



看板写真

技場(征服以前、神殿で行われていた腰を使ったサッカーのような競技。ドーナツ屋の看板の写真を参照されたい)という、大量に水が流れてる場所だった。その流水が兩岸をペロタの競技場のように削りと

った地形だったから、そのように呼ばれたのだと思うが、後にスペイン人たちはこの土地をラ・カニャーダ・デ・アグア・カリエンテ(温水の河床)と呼ぶようになった。私は2006年にその地を訪ねている。コニンが集落したヌマダヘイはその名の通り、ペロタの競技場のような川の



ヌマダヘイ

両岸に30家族が集落するのに十分だが、北と南から山がせまるような土地で、それほど広くはない。コニンがこの土地を選んだのは、この水量の多い川とチチメカ族からの攻撃を回避できる地形だと判断したためだと思う。

先住民でありながらケレタロ市の基盤を作ったとされるコニンのことが気に入り、私は彼の故郷を訪ねてみることにした。西になだらかに下る斜面の途中にあり、今日では小さいとはいえ中央広場(ソカロ)があり、整備された美しい街並みを持った村だった。美しいのは街並みばかりでなく、周辺にはトウモロコシ畑とその名前の通り団扇サボテン(ノパル)とそれにまわりつく清楚な花のある桃源郷だった。500年前には、集落を切り裂くように下り落ちる溪流の周辺にできた小さな集落だったようだ。村を徘徊していたら、今は使用されていない石作りの洗濯場があり、その上流に湧水池があった。その



湧水池の石板に1450年の年号が刻まれていた。征服の約70年前にコニンの先祖がこのノバラを定住の

←洗濯場 ↓湧水池

地に選んだ理由はこの湧水だったのだろう。そしてコニンが先のヌマダヘイの土地を選んだ理由はまた豊富な水だったのだ。



さて、話をヌマダヘイに戻そう。現在ではラ・カニャーダと呼ばれているこの地には、その川をせき止めているダムがある。周辺には広い耕作地は見られないから農業用水のためのダムではない。これは壮大な水道橋経由でケレタロ市に上水を送るためのダムだった。

コニンがこの地に定住を決め、やはりチチメカ族の回遊するこの地でやはり交易の仕事をしていたときに、あるスペイン人と遭遇することになる。それは1530年以降のことだと思われるが、その男は防人の村アカムバロの収税領主となったフアン・ペレス・ボカネグラだった。アカムバロはグアナフアト州南部に位置する、やはり大河レルマ川によって、北のチチメカ領域と南のミチョアカンのタラスコ王国間の自然の要塞になっていた所で、サン・フアン・デル・リオと同様にチチメカ領域への入り口となっていた。ボカネグラはコルテスと一緒に征服戦争を戦った兵士ではなかったが、初代副王アントニオ・デ・メンドーサと深い親交があり、前任者ゴンサロ・リオボ・デ・ソトマヨールが放棄したこのアカムバロの収税領主に収まった人物だった。前任者が放棄した理由は正確にはわからないが、首都メキシコから遠く、まさに辺鄙なところだったから嫌気がさしたからか、あるいはスペインに帰国しなければならなかったからか。ところが、先のボカネグラの前向きな思考は、彼をチチメカ領域での探検に

駆り立てたのだった。アカムバロの先住民を引き連れてチチメカ領域に入り込み、耕作に適した土地を見つけては集落を作り、まるでカタツムリのように彼は領地を広げてそのの収税領主となっていた。今はアカムバロの話に深入りできないので、この辺で切り上げるが、ボカネグラはこうした探検を通してオトミ族のコニンに偶然、遭遇したとされている。コニンはこの地の案内係としてボカネグラとともに行動を共にしていたようだ。残念ながらこの辺りの記録は残されていない。

見事に変身したゲレンダロ

コニンがヌマダヘイからゲレンダロに移動したのは 1531 年頃だった。その理由はもっと広い土地で耕作できるようにするべきだと思いついたからに違いない。その頃からコニンはボカネグラと親交を深め、早い時期にキリスト教に改宗している。改宗後の名前はボカネグラのファースト・ネームをもらいエルナンド・デ・タピアとなった。こうした改名は改宗と共にスペイン風の名前に変えられているために、その後、名前から先住民かスペイン人かの判断がつかなくなった。コニンことタピアが移住したゲレンダロは、首都メキシコ市から 300 キロほど遠方にあり、副王はその土地がどんなところかも皆目、見当もつかない土地だったために、副王と親交のあるボカネグラの「一声」でオトミ族のエルナンド・デ・タピアに土地の分譲を許すことに、あるいはボカネグラはタピアが先住民であることを伏せて分譲申請した結果だったと思う。それはメキシコ植民地では異例なことだった。土地はもともと国王のものであって、先住民が古くから耕作していた土地はそのまま先住民が使用可能だったが、新しく占領された未開拓地、特に北のチチメカ領域では領地拡大、治安維持を目的にして入植したスペイン人に限って分譲が許されていた。だが、残念ながら、先住民には許されることはなかった。この土地分譲に関する話は、拙著「先住民のメキシコ」(明石書店)を参考にされたい。

瓦礫の荒地ゲレンダロ、今日のケレタロは、ヌマダヘイの川下にある土地で、タピアはその川の周辺に土地の分譲を受けている。ヌマダヘイと異なってきたわめて開放的で、チチメカ族の攻撃を受けやすい地形だった。だが、タピアは開墾して徐々に村の規模を広げていった。それはまさにケレタロ市中心の歴史地区でのことだった。

このゲレンダロはいつの間にかスペイン語の響きのあるケレタロに代わり、ヌマダヘイの川は今はケレタロ川になった。エルナンド・デ・タピアはケレタロ川からの灌漑で土地の肥沃化につとめ、耕作地を拡大していった。後にこの地に着いたスペインたちは、その周辺部に入植したが、それはまさに周辺部を造ることになっただけだった。ケレタロが重要性を増したのは、1546 年に 300 キロほど北のサカテカスでの銀鉱山の発見だった。それはケレタロが首都メキシコ市とサカテカス鉱山とを結ぶ銀街道の

中継点に偶然にも位置していたからで、サカテカス鉱山で必要となる労働者あるいは労働家畜のための食糧補給地として、期待されるようになったからだった。ケレタロの繁栄は銀鉱山によって求められた農業生産によるものだった。

こうして富を手にしたエルナンド・デ・タピアは信仰心が篤く、先住民はもちろんのことスペイン人にも信望があり、ケレタロの偉大な領主になっていた。今日、町の中心に鎮座するケレタロ最初の修道院サンフランシスコ(現・博物館)の建設の際には、



サンフランシスコ修道院



セネア公園

自身の靈魂救済の 48 ミサを条件に修道士達のための基金を創設し、広大な土地と資金を提供したのだそう。メキシコ独立後の修道会世俗化による財産の分散を機にした都市整備で、その目の前にコレヒ

ドラ通りが建設され、修道院・教会の前庭が分割されてしまった。修道院前のセネア公園を除いて残念

ながら今は以前の威容を想像することがかなわない。博物館になった旧修道院を見学してみると、その規模の大きさがわかる。修道院の門衛所だ

った入り口から中に入ると、2 階建ての見事な回廊が 2 つ。奥にある 2 つ目の回廊の周りには約 30 もの修道士たちの独居房が取り囲んでいる。相当数の修道士受け入れが可能だった。修道院内にはその人数に見合うだけの自給自足の畑が用意されていたから、その規模は推して知るべしである。オトミ族のコニンことタピアは、スペイン人に劣等感を抱くことなく生きるべきだとして先住民の子の教育の重要性を感じていて、その任を修道士に期待していたという。自分が持っているものを、救貧院やフランシスコ会の修道院に惜しみなくつぎ込んだ。これがエルナンド・デ・タピアが成し遂げた仕事だった。

1571 年にケレタロの領主エルナンド・デ・タピアは死去している。彼の残した財産は膨大なものだった。その財産に嫉妬を覚えていたスペイン人入植者たちは翌年、相続したタピアの年若い息子ディエゴを相手取り訴訟を起こしている。その訴訟理由は、先住民の土地所有に関する訴えだった。



タピア家の遺産

先述したが、植民地時代の先住民への土地分譲が認められていないという論争が再燃したのだという。だがその 10 年後にディエゴは勝訴し、父親の残した財産を相続している。ディエゴも父と同じくこの土地の領主として相続した財産を懸命に護りきった。そして先のラ・カニャーダから上水を市内に引くた

めの大工事、有名な水道橋を 1634 年に完成させたのはこのディエゴ・デ・タピアだった。

先のラ・カニャーダの取水口となっているパン・デ・ドゥルセ（お供え餅のようなモニュメント）から一直線の水道橋を通して、上水を旧市街地南にあ



パン・デ・ドゥルセ



水道橋

るサンタ・クルス修道院の小高い丘まで引いた。その終端には今も貯水槽と蛇口が遺跡として残されている。そこから市中に生活用水を送る施設となっていた。先の修道院はそれまで建物の屋上で雨水を受け止め、タンクに貯水して生活用水を確保していたというから大いなる便利となった。だが、その便利は修道院ばかりでなかった。

黄金のバロックの花咲く

さて、オトミ族の血を引くタピア家は、信仰心の篤いエルナンドの四人娘のうち一人マリアの娘が 1601 年にサンタ・クララ修道会に入門するにあたり、持参金のほかにかなりの喜捨をしたことを契機に、その後先の尼僧院に大いに肩入れしてゆくことになった。ついにはディエゴの一人娘ルイサがやはりサンタ・クララ修道会に入門すると、タピア家を相続する人間は皆無となってしまったのだ。そしてディエゴは自分の死後のことを考えて、全財産を先の尼僧院にたいして相続手続きをとっていた。

こうして狭いサンタ・クララ尼僧院・教会はバロックの宝石箱となった。ディエゴ・デ・タピアが父親の築き上げたものをスペイン人に手渡すことをひたすらに拒んだ結果だった。



驚いたことに狭いケレタロ旧市街になんと 7 つの修道院がある。これらの修道会はすべて托鉢型の修道会で、市民からの喜捨や寄付で維持していた。このことはそれを支えるだけの信者がいたと考えられるが、実はそうではない。各修道会はディエゴからのような土地の相続を受けたり、そうした土地の賃貸収入、アシエンダ（大農場）経営、あるいはアシエンダ所有者が修道会のために設立したを基金を通して肥大化していったのだ。残念ながらメキシコ先



サンタ・クララ修道院

住民の汗の結晶はアシエンダ経営者に、そして回り回って修道会や教会に集積、蓄積され、先住民に還元さ

れることは決してなかった。

瓦礫の荒地ゲレンダロは、今はバロックの花の咲き乱れる別天地に変身した。すべては紹介できないが、ケレタロの黄金のバロックをケレタロのこうした歴史の視点から見ていただけたらうれしい。



サンタ・ロサ修道院

10 年ほど前のこと。ケレタロに滞在していたある日、偶然にも民族衣装に身を包んだ若い人たちが、サンタ・ロサ修道院前の広場で舞踊を披露している場面に遭遇した



ことがあった。観覧者がいるわけではないので、祭りのリハー

サルかなと思いながらその踊り子だちにレンズを向けて撮影していたら、背後から声をかけるセニョールがいた。「お代をいただきますよ」と言うと左目でウインクして見せて、ケレタロ州のプロモーション・ビデオを制作するクルーだという。そう、ケレタロの旧市街はどこをとっても絵になる最適なロケーションなのだ改めて知らされたのだ。

(連載その 2 完)

トピックス

メキシコ市の新国際空港 AIFA が開港

メキシコ市 CDMX 都市圏の第 3 国際空港「フェリペ・アンヘレス国際空港 AIFA」が 3 月 21 日開港した。同空港はメキシコ州スパンゴにあるサンタ・ルシア空軍基地内に建設された。AMLO 政権の 4 大インフラ計画の最初の完成案件だ。AIFA の利用客数は年間 2,000 万人を想定も、所管の国防省は 2022 年 250 万人、23 年 500 万人を見込み、メキシコ市国際空港 AICM の混雑緩和の即効薬となりそうにもない。また、市街地からの距離が AICM の 7km と比べて AIFA は 50km で補完空港となるにはアクセスの早急な改善が必須だ。運航は現在、Aeroméxico Connect など LCC3 社の国内線とベネズエラの Conviasa のカラカス線のみで、いっそうの充実が急がれる。

注 1. フェリペ・アンヘレス (Felipe Ángeles : 1868~1919) はメキシコ革命時の将軍。マデロ政権の将軍として当初サパタ反乱軍と交戦も 2013 年 2 月にウェルタ反動政権に逮捕 (悲劇の 10 日間)。その後カランサ革命政権に与するも 14 年 1 月にパンチョ・ビジャの北部師団に参画。しかし、19 年 11 月、カランサ政府の軍法会議で死刑判決。

注 2. 4 大インフラ案件は他にタバスコ州ドスボカス製油所建設、マヤ観光鉄道敷設、テワンテペック地峡開発。AIFA は、前政権のメキシコ州テスココ新空港 NAIM 建設を AMLO 政権が「国民の声を尊重」と中止し、国防省が空軍基地を拡張新設。なお、首都圏第 2 空港として市街地から 60km 離れたトルーカ国際空港 AIT がメキシコ州にある。2006 年新装開港。

メキシコの著名文化人・スポーツ選手等の人名録

～その1～

メキシコ・日本アミーゴ会会員 桜井悌司
一般社団法人ラテンアメリカ協会常務理事

桜井悌司会員は昨年、ラテンアメリカ協会のホームページに「ラテン好きのためのリベラルアーツ」と題して中南米各国縦断で12回連載されました。このほど国別に再構成した「著名文化人・スポーツ選手等の人名録・メキシコ編」をまとめられ、アミーゴ会会員にも提供して下さることになりました。今号から分割掲載します。お楽しみください。なお、「メキシコ編」は同協会 HP に一括アップ(<https://latin-america.jp/archives/52130>)されています。メキシコ編の内容は下記の通りです。

- (1)メキシコのノーベル賞受賞者：第50号掲載 (2)メキシコの著名作家・詩人：第50号掲載
(3)メキシコの著名画家 (4)メキシコの著名作曲家 (5)メキシコの建築家
(6)メキシコ出身のメジャー・リーガー (7)メキシコの著名サッカー選手 (8)メキシコの著名ボクサー
(9)国際空港に見るメキシコ人 (10)紙幣にみるメキシコ人

桜井さんは現在、ラテンアメリカ協会常務理事、NPO 法人イスパニカ文化経済交流協会理事長。1967～2008年ジェトロ勤務(メキシコ、チリ、ブラジル、スペイン、イタリアに計15年半駐在。展示事業部長、監事)。2008～15年関西外国語大学教授。 <編集部>

(1)メキシコのノーベル賞受賞者 3名

ラテンアメリカには16名のノーベル受賞者がいる。メキシコはアルゼンチンの5名に次いで、第2位で3名が受賞している。文学賞1名、化学賞1名、平和賞1名である。以下紹介する。

*オクタビオ・パス Octavio Paz : 1990年文学賞

1914年～1998年。作家、詩人、批評家、外交官。主要作品はメキシコ文化やメキシコ人の行動様式を紹介した「孤独の迷宮」El Laberinto de la Soledad、「弓と豎琴」El Arco y la Lira、「インドの薄明」Vislumbres de la India等翻訳も多数あり。受賞理由は「広い視野を持ち、先鋭的な知性と人文主義的高潔さを特徴とした情熱的な作品に対して」となっている。駐日代理大使、インド大使。ケンブリッジ大学、ハーバード大学等で教鞭を取った。

*マリオ・モリーナ Mario Molina : 1995年化学賞

1945年～2020年。科学者、マサチューセッツ工科大学教授。若い時にフロンガスのオゾン層に対する

危険性についての論文を書く。フロンガスによるオゾン層破壊の危険性を指摘し、他の2名の科学者とともに受賞。受賞理由は「オゾン層の分解に関する研究」による。

*アルフォンソ・カルロス・ローブレス

Alfonso Carlos Robles : 1982年平和賞

1911年～1991年。外交官、政治家。ラテンアメリカとカリブを非核地域と定めた「トラテロルコ条約」の成立に尽力したことに対して、平和賞が贈られた。

このトラテロルコ条約には地域のほとんどの国が署名し、1967年に発効した。国連大使、外務大臣を歴任、その後、ジュネーブ軍縮会議メキシコ高級大使を務めた。

(2)メキシコの著名小説家・詩人 17名

ラテンアメリカの著名小説家・詩人を選定するにあたり、スペインやラテンアメリカで授与される各種文学賞、内外のラテンアメリカ文学の専門家等の書籍、インターネット等を通じて、メキシコからは下記17名を選定した。

*ソル・ファナ・イネス・デ・ラ・クルス

Sor Juana Inés de la Cruz

1651年～1665年。ヌエバ・エスパーニャの詩人、修道女、スペイン黄金世紀の演劇作家。17歳で修道女になり、サンヘロニモ修道会サンタパウラ修道院に入る。以後、詩作に没頭し生涯を終える。代表作は、演劇「家のポーン」Los empeños de una casa、詩「最初の夢」Primer sueño、散文「アレゴリカル・ネプチューン」Neptuno alegórico。また「知への賛歌 修道女ファナの手紙」も訳されている。

*フェルナンデス・デ・リサルディ

José Joaquín Fernández de Lizardi

1776年～1827年。作家、ジャーナリスト。ラテンアメリカ最初の小説と言われる「疥癬病みのオウム」El Peringuillo Sarmiento を発表した。ピカレ

スク様式を借りながら、植民地時代末期の教育、宗教等のメキシコの後進性を批判した作品。

*グティエレス・ナヘラ Manuel Gutiérrez Nájera

1859年～1895年。詩人、小説家。キューバのホセ・マルティとともに詩の分野の新しい運動であるモデルニスモを始めた。AZUL誌の発行。代表作は、「はかない物語」Cuentos Frágiles、「ヨブ公爵」La Duquesa de Job 等がある。

*アマード・ネルボ Amado Nervo

1870年～1919年。ナヘラの弟子でモデルニスモの詩人。Revista Moderna誌を創刊し、多数の詩作を発表した。代表作は「動かぬ恋人」La Amada Inmóvil、「黒真珠」Perlas Negras。

筆者は学生時代に彼の「動かぬ恋人」をテープで聞き、感動したことを覚えている。

***マリアノ・アスエラ Mariano Azuela**

1873年～1952年。メキシコの医者、作家。後の大統領のフランシスコ・マデロに仕えた後、パンチョ・ビジャの軍医としてメキシコ革命に従軍。代表作は、「虐げられた人々」 Los de Abajo で、メキシコ革命の残虐さを悲劇的に描いた。メキシコ国民科学・芸術賞を受賞。

***マルティン・ルイス・グスマン**

Martín Luis Guzmán

1887年～1976年。作家、ジャーナリスト、政治家、外交官。マリアノ・アスエラなどと共に革命小説の先駆者。代表作は、「鷲と蛇」 El águila y el Serpiente や「領袖の影」 La Sombra del Caudillo などがある。パンチョ・ビジャの革命軍の顧問を務めた。メキシコ国民科学・芸術賞を受賞。

***オクタビオ・パス Octavio Paz**

1990年ノーベル文学賞受賞(再掲)

1914年～1998年。作家、詩人、批評家、外交官。主要作品はメキシコ文化やメキシコ人の行動様式を紹介した「孤独の迷宮」 El Laberinto de la Soledad、「弓と豎琴」 El Arco y la Lira、「インドの薄明」 Vislumbres de la India 等翻訳も多数あり。受賞理由は「広い視野を持ち、先鋭的な知性と人文主義的高潔さを特徴とした情熱的な作品に対して」となっている。駐日代理大使、インド大使。ケンブリッジ大学、ハーバード大学等で教鞭を取る。

***フアン・ルルフォ**

Juan Nepomuceno Carlos Pérez-Rulfo Vizcaino

1917年～1986年。小説家、写真家。20世紀最高の作家を選ぶアルファグアラ社の投票でホルヘ・ルイス・ボルヘスとともに選ばれた。代表作は、「ペドロ・パラモ」 Pedro Páramo、「燃える平原」 El llano en llamas、「黄金の鶏」 El Gallo de Oro。アストウリアス皇太子賞を受賞。

***フアン・ホセ・アレオラ Juan José Arreola**

1918年～2001年。作家、大学教授。メキシコ国立自治大学やメキシコ作家センター等で後進の指導にも従事した。代表作は、短編「転轍車」 El Guardaguasas、「市場」 La Feria、「共謀奇談」 Confabulario。国民科学芸術賞他の賞を受賞。

***カルロス・フエンテス Carlos Fuentes**

1928年～2012年。作家、評論家。ラテンアメリカ文学最大のプロモーター。代表作は「我らが大地テラ・ノストラ」 Terra Nostra (ロムロ・ガジェーゴス賞)、「澄み渡る大地」 La Región más Transparente、「アルテミオ・クルスの死」 La Muerte de Artemio Cruz、「アウラ」 Aura。1987

年セルバンテス賞、アストウリアス皇太子賞、ビブリオテカ・ブレベ賞等受賞。多数の日本語訳書あり。

***エレナ・ポニアトウスカ Elena Poniatowska**

1930年～。作家、活動家、ジャーナリスト。名門の家柄で親族にも有力者が多い、代表作は「トラテロルコの夜」 La Noche de Tlatelolco で、有名なトラテロルコ事件を証言で構成した。その他「レオノーラ」 Leonora。国際的に評価が高く、2013年セルバンテス賞、「汽車は最初に通り過ぎる」 El tren pasa primero でロムロ・ガジェーゴス賞、ビブリオテカ・ブレベ賞等を受賞。

***セルヒオ・ピトール Sergio Pitol**

1933年～2018年。作家、翻訳家、外交官。長編小説、エッセイ、翻訳、回想録などバラエティのある著作を発表。代表作は「愛のパレード」 El Desfile de amor、「逃走の技術」 El arte de la fuga。2005年セルバンテス賞、その他国民科学芸術賞等受賞。

***フェルナンド・デル・パソ**

Fernando del Paso Murrante

1935年～2018年。作家、外交官、画家。代表作は「帝国の動向」 Las noticias del Imperio で、フランスによる第2回目のメキシコ侵略を描いた作品。1982年ロムロ・ガジェーゴス賞、2015年セルバンテス賞を受賞。

***ホセ・エミリオ・パチェコ José Emilio Pacheco**

1939年～2014年。随筆家、小説家、詩人。代表作は「メデューサの血」 La Sangre de Medusa、「砂漠の戦い」 La batalla en el desierto。2作共日本語に翻訳されている。2009年セルバンテス賞を受賞。

***アンヘレス・マストレッタ Angeles Mastretta**

1949年～。作家、ジャーナリスト。メキシコの社会的、政治的現実を反映させる女性像を描く。代表作は「私の命を引き出して」 Arráncame la Vida で暴力と狡猾さで出世する男の話。1997年ロムロ・ガジェーゴス賞を受賞(対象作品は「恋愛の悪」)。

***フアン・ビジョーロ Juan Villoro**

1956年～。作家、コラムニスト、随筆家。現在メキシコで最も高く評価されている作家の一人。代表作は「野生の本」 El Libro Salvaje、「証人」 El testigo 等。彼の短編のいくつかは翻訳されている。

***ホルヘ・ボルピ Jorge Luis Volpi Escala**

1968年～。ラテンアメリカ文学ブームの世代からの脱皮を目指したポスト・ブームの作家。代表作は「クリングゾールを探して」 En busca de Klingsor で、この作品でビブリオテカ・ブレベ賞を受賞。その後、「選ばれし少女たち」 Las elegidas でアルファグラ賞を受賞した。(連載その1完)

トピックス 全州が3期連続で緑色の感染警戒

メキシコのコロナ感染警戒信号は3月21日以来3期連続で全32州が通常警戒の緑色となった(期間4/18～5/1)。今年第3週(1/16～22)以来発症者数が漸減、第14週(4/3～9)の1日当たり発症者数は473人(暫定)と低水準。AMLO大統領は成人のワクチン接種を4月中に完了すると言明(連邦保健省4/16)。

あとがき：阿部さんの歩行記第2回はケレタロ。知っているつもりでも知らない土地を探し歩く楽しみ。桜井さんのメキシコ著名人紹介第1回開始。多士済々の分野別人物発掘。お楽しみに。桜と椿の競演に続いて目映い新緑の深まり。か、と思えば目眩くツツジの世界。メキシコのハカランダの花も一緒に眺めたい日本の春。改めて新入生のように気分一新して編集専念。[20220417か]

アミーゴ会「2021年度決算案・2022年度予算案」の報告

メキシコ・日本アミーゴ会 幹事会

メキシコ・日本アミーゴ会の活動は2021年度も、新型コロナウイルスの感染拡大継続のため対面での諸活動が一切実施できず、アミーゴ会メルマガでのメキシコ関係催事の案内配信や「アミーゴ会だより」の季刊配信などオンラインでの活動にとどまりました。したがって、顔の見える総会・懇親会も歴史・文化講演会も残念ながら開催が適わず、また恒例のフィエスタ・メヒカーナ@お台場も会場の東京五輪使用などで開催不可となりました。

ここに「2021年度決算案」を「2022年度予算案」とともに総会に代えて本号にて下記記載の通りご報告申し上げます。会員の皆さまのご承認をお願いいたたく存じます。

なお、決算案は南郷茂伸監査役に4月27日付けでご承認いただき、メール幹事会での審議を終了しております。

また、昨年半ばのアミーゴ会事務所の事務局長宅への移転に関連して郵貯銀行の諸手続き（7月以降の入金明細回復および郵貯ダイレクト登録に向けた時間の空費）に思わぬ時日を要し、結果として決算作業が遅れました。さらに事務局業務軽減の一環として2021年に導入しました経理月次処理に係わる業務委託については、上記事情もありこれを実施しませんでした。今年度に再計上しました。

一日も早く感染症が収束し諸々の対面活動が再開できることを期待します。どうぞご自愛ください。

2022年4月28日 アミーゴ会事務局長 笠井道彦

2021 年度決算案	
収 入	(円)
会費 (45名+御宿2万円) (注)	452,110
小計:みずほ銀行(125名+御宿)	395,000
小計:郵貯銀行(20名)	57,110
受取利息	3
収入合計 (A)	452,113

注：会費を未払者宛て過去3年分遡及請求。退会者計5名。
 郵貯入金は本来6万円も1名が通知費用110円を負担。
 新導入通知費用3,000円を徴収。来期から経費とする。

支 出	(円)
小口現金支払計 (別記)	12,637
郵貯入金通知再発行料 (注)	633
WEB サイト・HP 維持費	18,000
その他振込手数料	930
未払い費用	103,879
2021 年度編集部費	50,000
2021 年度事務局費	50,000
雑費	3,879
支出合計 (B)	136,079

当期収支 (A)-(B)	316,034
--------------	---------

注：郵貯が入金通知費@110円徴収制度導入。
 記載金額は郵貯銀行請求額(110円+523円)。

前年度繰越金	2,589,613
当期収支	316,034
次期繰越金	2,905,647

(別記) 小口現金支払い明細

費 目	(円)
通信費 (会費請求140名分郵送料)(注)	11,760
消耗品費 (コピー用紙代等)	877
小口現金支払い計	12,637

注：郵送会員宛て会報未送付。

(参考) 2021 年期末残高

項 目	(円)
期末残高 内訳：みずほ銀行	672,955
：ゆうちょ銀行	2,334,425
預金合計	3,007,380
現 金	2,146
合 計	3,009,526

2022 年度予算案	
収 入	(円)
1) 会費収入 (115名+御宿2万円)	365,000
みずほ銀行 (100名+御宿)	320,000
ゆうちょ銀行 (15名)	45,000
2) 事業収入	90,000
総会・懇親会費 (30名×3,000円)	90,000
3) その他収入	1
受取利息	1
収入合計①	455,001

支 出	(円)
1) 事業費	270,000
総会・懇親会(@5,000円×30名)	150,000
講演会事業費(2回×3万円+講師旅費3万円)	90,000
親睦ゴルフ会	30,000
2) 管理費	264,650
WEB サイト・HP 維持費	20,000
西日本幹事旅費(交通費28,000+宿泊10,000)	38,000
西日本懇親会支援金	10,000
編集部費	50,000
事務局費	50,000
経理業務委託費	30,000
郵貯入金通知料金 (@110円×15名)	1,650
小口支払 (別記)	65,000
3) 特別支出	100,000
FM(フィエスタ・メヒカーナ)協賛金	100,000
支出合計②	634,650

当期収支	△179,649
前期繰越金	2,905,647
時期繰越金	2,725,998

(別記) 小口現金支払予算	(円)
通信費	35,000
消耗品	5,000
予備費	25,000
小口現金支払合計	65,000

以上